取手に残した二万石、伊奈半十郎忠治

新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会配布資料

小貝川沿いの相馬二万石

古来為政者（いせいしゃ、政治家）の仕事は水を治めることだと言われます。

ことに日本は狭い国土に山が多く、雨が多く、急峻な川筋を水が駆け下ってくるような河川ばかりです。大陸の大河のようにあふれた水が広大な範囲をじわじわと侵食してくる氾濫と違い、ひとたび大雨が降ればその水は大小無数の河川に集まり、中流、下流域で本流と合流し、猛烈な濁流となって堤防を壊し、乗り越え、人も家も押し流し田畑を泥で埋めてしまいます。小貝川や鬼怒川もご多分に漏れず、同じような河川で、しかも河川の代表格である利根川の支流であります。現代の土木技術をもってしてもその河川の制御は難しく、ましてや重機もコンクリートもない時代の治水の困難さは現代人には想像しにくいかも知れません。

江戸時代関東の治水利水に腐心した伊奈親子は、代表的な利根川東遷事業に六十年、葛西用水の完成に更に六十年を費やし、試行錯誤の困難を乗越え関東平野の治水事業に携わってきました。

特に、忠次の次男忠治は、下総国相馬郡取手から谷和原の小貝川沿いに、人工百万都市となる江戸の人達の食糧源となる、谷和原三万石と相馬二万石の新田を築き現在に至ります。

取手の発展に多大なる貢献主となった新田開発奉行伊奈半十郎忠治は取手の偉人として忘れてはならないと云えるでしょう。

父忠次の前半生　（関東入府まで）

忠次は天文19年(1550)　三河国幡豆郡小島（愛知県西尾市）城主、伊奈忠基の十一子、忠家の嫡男として生まれました。名は備前守と称しています。

後の天下人徳川家康の信頼が厚かった忠次でしたが、永禄6年(1563)三河で一向一揆が起き、家康の家臣団は家康側と一揆側の真っ二つに分かれて戦いました。結果は、一揆軍は敗れて一揆軍についた忠家は三河から追放となりました。

天正10年(1582)6月2日、明智光秀が突如の謀反で本能寺の乱を起こし主君織田信長を討ちました。

信長の勧めで堺を見物中であった家康一行は知らせを聞いて驚愕。供の者30名足らずは光秀の追手から一刻も早く逃げるほかありませんでした。

このとき、忠次は家康の　近習の小栗吉忠を通じて家康のもとに馳せ参じ、忠次一世一代の賭けに身を投じることになりました。

一行は堺から伊賀を越えて伊勢まで逃避行しますが、途中から家康一行と別れた穴山梅雪（あなやまのぶただ）らが落ち武者狩りで落命していました。家康一行は茶屋四郎、次郎などの機転により辛くも脱出に成功します。忠次はこの伊賀越えに同行して家康と生死を共にすることにより、主君に背いた罪を許され三河に帰参することができたのです。

忠次は、これを機にその後小栗同心の1人として、内政に、土木技術に、戦の後方支援に頭角を現していきます。やがて小栗吉忠が没すると忠次がその後を継ぐ形で同心たちの中心になり、関東入府以降の内政的な課題に取り組んでいくことになりました。

結城紬

【水戸市の備前堀橋の忠次像】

関東入府、天正18年(1590)小田原北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされます。これが7月3日。1ヵ月後の8月1日には家康は江戸に入ります。
この日が『八朔の江戸お討ち入り』として代々幕府の重要な年中行事になります。
家康は関東入府に際し、4人の代官頭を任命しました。大久保長安、長谷川長綱、彦坂元正、そして伊奈忠次です。忠次を関東代官頭に任命するときに家康の懐刀の本多正信が忠次に出させる誓詞の前文を書く事を命じられますが、正信が家康に何と書けばよいでしょう?と聞くと。
「一つ、関東を自分のように大切にすべし。
二つ、部下を依怙贔屓すべからず」と言い。
3つ目はと問われると、「それだけじゃ」といったと言います。つまりはお前にすべて任すから自由にやれ!と言われたに等しいものでした。
伊奈忠次のグランドデザイン
忠次は江戸を天下の府とするための施策条件。
1、江戸の後背地である関東の民心を治めながら幕領支配を確立しなくてはならない。
2、関東の生産力を上げなくてはならない。
3、江戸城下を大人口が住めるように拡大する。
4、大人口を支える物流網を作る。
5、乱流して武蔵国東部を襲う利根川の改修。
6、飲料水用の水をひかなければならない。
天下統一、江戸開府という政治的変化に対応するためにこれらの施策を速やかに実行しなければならない。これは現代まで続く社会基盤整備となりました。

結城紬と忠次　(結城紬の折りと歴史より)

結城紬は古代からこの地方の特産として知られていましたが、その永い歴史の中でも、存亡にかかわる大きな出来事がいくつかありました。
その一つが慶長6年(1601)に行われた国替でした。
この時、結城家第18代の城主であった結城秀康(徳川家康の二男)は、越前に六十七万石を与えられ、家臣はもとより寺院、職人、商人にまで及ぶ町ぐるみの大移動が行われたのです。
そのために紬織りを始めとする諸産業はすっかり衰えてしまうとともに、その領域は大名領、旗本知行所、天領に分割されてしまいました。
しかし結城紬の産地であった現在の結城市周辺は、その大部分が天領となったため、翌7年に初代代官として伊奈備前守忠次が派遣されて来ました。
彼は城下の衰退を憂い、その振興策として紬の改良発展のために力を注ぎました。
幕府に要請して信州上田から織工を招き、染色の改善と柳条の織り方の技術を導入したのです。
その結果結城紬の名声はますます上がり、紬の生産は増大するとともに、販売市場も拡大して結城紬の名前も次第に広まっていきました。

忠治像

忠次の後継者忠治

伊奈備前守忠次は激務のため過労で失神するほど働きますが、慶長15年(1610)に折れるように病没します。意外にもその代官職を嫡男の忠政ではなく次男の忠治が継ぎます。
勿論その8年後に忠政が34歳で没し、その子忠勝も同年9歳で早逝したためですが、忠政は忠次病没の2年前に大番頭として従五位下築後守に叙されていることから、すでに番方(武人)として忠次遺領を相続することが決まっていたように思います。
そして忠次の本業である代官職(役方)は次男の忠治に継がせる。忠次は生前からそのように決めていたのではないでしょうか?そうでなければ関東代官頭を継いだ忠政が大坂夏の陣に動員されて武将として首級三十を挙げる活躍をするなど考えられないからです。それは忠次のささやかな意地ではなかったかと思います。
生前忠次は本多忠勝などの武将から戦働きをしないで成り上がったものとしてさげすまれていたそうです。
無論主君の家康はそんな考えはなく、むしろ武将以上に重用しましたが、忠次にも三河武士としての誇りがあったのでしょう。
多くの兄弟親戚が戦場で死んでいった伊奈家は武門の誉れとの自負があったのだと思います。
いずれにしても元和4年(1618)に半十郎忠治が関東代官職を継ぐと、忠次の元部下たちの多くが忠治の下に行き、忠治は新しく拝領した赤山に陣屋を構え、ここから伊奈家の関東開発第2幕が上がること

になるのです。それは父忠次の引いたレールの上を走りながらも、父に勝るとも劣らない金字塔を打ち立てることになりました。

唯一の関東代官頭

先に関東入府の際、４人の代官頭が任命されたと書きましたが、大久保長安、長谷川長綱、彦坂元正、伊奈忠次のことで、関東入府から幕府初期あたりまでそれぞれが手腕を発揮して、大いに内政に貢献しました。しかし、長安は死後に不正蓄財でおとしいれるため、ありもしない事を目上の人に告げられ、讒言(ざんげん)され男児全員が慶長18年(1613)処刑。元正も家康の勘気を蒙り慶長11年(1606) 失脚、。長綱は嗣子(しし、後継者)なく没しました慶長９年(1604)。このように忠次以外の代官頭が継がれることなく次々に消滅してしまったのです。

唯一忠次の跡を忠政、忠治と継いだ伊奈家だけが代官頭として残りました。

代官は幕府直轄領（徳川家の領地）を支配するのが仕事ですが、代官頭は初期の徳川政権にあって職制が定まらない頃の役職で、あらゆる仕事をこなしました。いわゆる便利屋、何でも屋です。

その結果さまざまな権限を持つようになりました。

関東郡代伊奈家が広範に持っていた権限は実はこの初期の代官頭の何でも屋の特殊権限がそのまま相続されていったからなのです。

伊奈半十郎忠治　（はんじゅうろうただはる）　年表		
慶長 11 年(1606)	忠治、勘定方に出仕。植田谷領８０５石を賜る	
元和４年(1618)	兄忠政が没。家督は嫡子忠勝が継ぎ、代官職は弟の忠治が継ぐ。赤山領を拝領し源長寺を菩提寺とする	
	忠勝早逝（９歳）のため小室藩は改易	
元和７年(1621)	新川通りの開削。利根川と渡良瀬川が合流	
	第一回赤堀川の開削, 鬼怒川と小貝川分離工事始める	
元和９年(1623)		家光３代将軍に就任
寛永２年(1625)	第２回赤堀川の開削、山田沼堰を普請	
寛永５年(1628)	中山道を付替え、氷川神社参道の西側に大宮宿をつくる	
寛永６年(1629)	元荒川の締切、入間川への付替え、鬼怒川の付替え	
	赤山陣屋を設ける。見沼溜井の造成	
寛永７年(1630)	小貝川の付替え、岡堰（相馬領・取手市）を普請	
寛永 12 年(1635)	江戸川開削着工	参勤交代制度施行
寛永 14 年(1637)		島原の乱
寛永 15 年(1638)	忠治勘定奉行になる	
寛永 18 年(1641)	権現堂川の掘削、逆川の開削、江戸川の開削竣工	
寛永 19 年(1642)	忠治関東郡代となる	
正保４年(1647)	領内に飢民なきをもって褒賞を受ける	
承応２年(1653)	忠治没、忠克関東郡代を世襲	
	玉川上水着工・竣工（水道奉行として忠治と忠克）	
承応３年(1654)	常陸川浚渫、赤堀川通水、利根川が銚子沖に流れる	

利根川東遷

伊奈半十郎忠治は父によく似ていたと伝えられています。風貌が似ていたのかもしれませんが、父の構想思想をよく理解して体現していたのだと思います。

唯一の代官頭となってしまった忠治は関東代官頭を兄から引き継ぐと早速、父の宿題に取り組みます。

その宿題とは江戸時代最大の国家プロジェクトとなった利根川東遷です。

何しろ江戸を含めた武蔵国東部は大きな溝の様な地形をしていて、そこを利根川、荒川、渡良瀬川といった大河が乱流して、ひとたび洪水に見舞われればその大きな溝がそのまま川のようになって襲ってくるのでとても人の住めるところではありませんでした。

従って、利根川をそのままにしては江戸を天下の府にすることなど到底不可能でした。

忠治の父忠次は利根川治水こそ関東開発の要だということがわかっていて、入府後すぐに中条堤の築堤、会いの川の締切に取り掛かります。

しかし忠次の余生では時間が足りずその仕事は忠治に受け継がれます。

利根川の東遷史

文禄３年(1594)	会の川の締切、千住大橋の架橋、中条堤の築堤	
慶長２年(1597)		慶長の役
慶長５年(1600)	この頃元荒川と綾瀬川を分離	関ヶ原の戦い
慶長８年(1603)		江戸幕府開府
元和７年(1621)	新川通りの開削。利根川と渡良瀬川が合流	
	第一回赤堀川の開削、鬼怒川と小貝川分離工事始まる	
寛永２年(1625)	第２回赤堀川の開削、山田沼堰を普請	
寛永６年(1629)	元荒川の締切、入間川への付替え、鬼怒川の付替え	
寛永７年(1630)	小貝川の付替え、岡堰（相馬領取手）を普請	
寛永 12 年(1635)	江戸川開削着工	
寛永 18 年(1641)	権現堂川の掘削、江戸川の開削竣工	
承応３年(1654)	常陸川浚渫、赤堀川通水、利根川が銚子沖に流れる	
明暦３年(1657)	焼失の為役宅を常盤橋御門内から馬喰町に移転	明暦の大火
万治２年(1659)		両国橋架橋
万治３年(1660)	幸手用水の開削、びわ溜井用水の開削	
	葛西用水の開削	
寛文５年(1665)		逆川の開削、

行田市の中条堤

田んぼの中を延々とこのような堤防が続いている。何とも不思議な光景

東遷の意図

元和４年(1618)に関東代官頭となった忠治は３年後の元和７年(1621)には一気に利根川東遷事業に取り掛かります。

年表に第一回赤堀川の開削。

利根川と渡良瀬川が合流。

第一回赤堀川の開削鬼怒川と小貝川分離工事始めるとありますが、これらが利根川を江戸湾から瀬替えして銚子沖に通水することを企図していたことは明らかです。

利根川東遷の肝は洪水常襲地の武蔵国東部の地溝帯から自然河川を取り去ること。そしてその後に用水路を引くこと。渡良瀬川、鬼怒川小貝川などの大河を利根川に結び付けて関東各地および東北と江戸を結びつける巨大な水運網を作ることにありました。

スケールと言い効果と言い、とても四百年前に構想されたとは思えないほど壮大な事業です。

今においても何十年、何十兆円掛かるか想像もつきません。地図も重機も鉄筋もコンクリートもない時代です。近代土木技術もない時代です。

徒手空拳(としゅくうけん、素手)で怪物に挑むようなものです。

この途方もない構想を信じ巨額を投じて伊奈家にゆだねた徳川代々将軍も肝が据わっています。

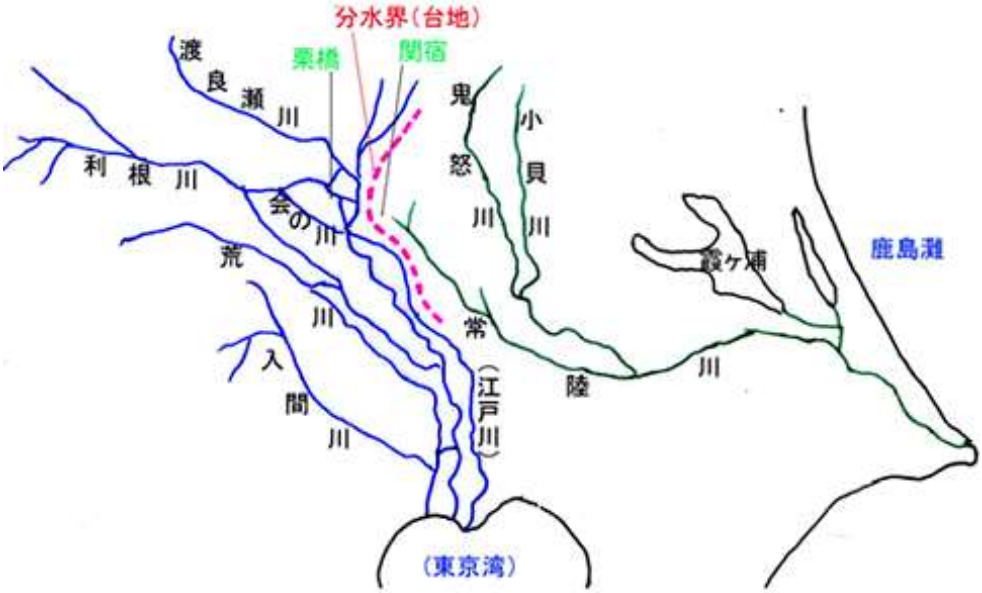
「もし夫れ(それ)利根川改修の如きに至りては、当時全く流域を異にしたる鬼怒川流路の合流せしめたるものにして、到底現今の如き世相においては計画し能はざるの底の大英断なりとす。」(明治以前日本土木史)と評されていますが、正にその通りだと思います。

※利根川東遷概略図を参照

２つの図を見ると、利根川水系のほとんどが人工で作られたことがわかります。

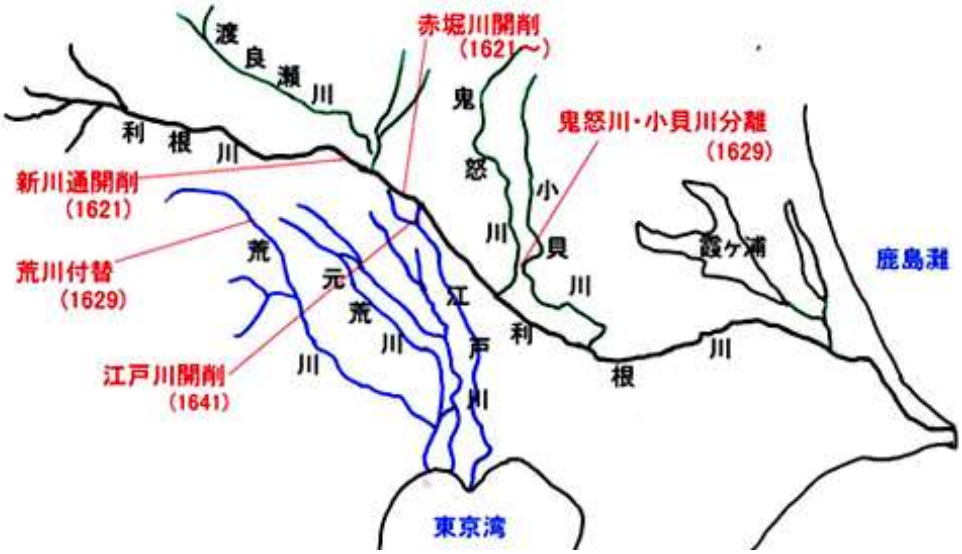
また、この利根川東遷で今に至る関東のインフラが作られたことがよくわかります。

これで百万人に及ぶ江戸という都市が成り立ちました。計り知れない恩恵だといえます。



しかし難工事に次ぐ難工事。資金不足、人足不足、流路の選定のむずかしさ、瀬替えや工事後の地域に与える影響。立ち退きを強制する住民たちの説得。

失敗すれば腹を切るぐらいでは済まないというプレッシャー。これらを乗り越え、やり遂げた伊奈半十郎忠治は江戸期随一の功績、偉人といしか言いようがありません。



関宿城博物館の展望台から見る利根川江戸川分岐点

赤堀川は渡良瀬川、常陸川分水嶺を掘り、常陸川は28キロ下流の鬼怒川合流部まで浚渫、逆川は南の権現堂川や江戸川のその当時の利根川本流から北(逆)に掘って赤堀川につなげました。

利根川東遷事業以前はここは原野が広がるばかりで川など無く、江戸川が利根川下流方向とは逆向きに「ん」の字型に取水口があり、江戸川には上流からの水流が流れ込まない様に工夫されている。

これが四百年前に造られた人工の景色であり、関宿は利根川水運大動脈をつなぐ最重要ポイントであり、難工事が集中した場所でもあります。

赤堀川と江戸川　(治水と水運)

東遷事業の苦労話は数多く残っています。

赤堀川の通水工事が2度失敗したときは、地元住民から「赤恥川」と揶揄されたといいます。失敗には違いありませんが、それだけ細心の注意を払ったからなのです。

赤堀川は利根川と渡良瀬川をあわせた大量の水の一部を常陸川に通して水運の為の水量を確保するための河川工事だったので流れすぎると常陸川下流が氾濫するし、少ないと船が通れないという極めて難しい工事だったのです。

伊奈忠克が赤堀川通水に成功した当時は川幅が18ｍしかありませんでした。

利根川東遷は利根川の本流を太平洋に流すことが目的ではないことがわかります。赤堀川以東の一連の工事は水運網の整備が目的でした。

東北から江戸に来る船が潮の流れに逆らって房総半島を迂回して江戸湾に入るルートが危険であるため、銚子から利根川を遡って安全に航行できるようにするためと、鬼怒川を通じて東北諸藩との物流網を作ることにありました。

また、江戸川は父忠次の瀬替え工事によって利根川が渡良瀬川の下流を流れるようになったのですが、そこで氾濫が相次ぐようになりました。

そこで、利根川の水を安定して排水するルートを開削する必要があったことと、また、北関東や銚子沖から来た船が安全に江戸まで航行する必要から作った人工河川なのです。

調査に次ぐ調査の結果下総台地を掘り進むことになったのですが、大変な難工事になりました。

資金も不足し切り開いた台地の木々を工事資材にして余りを売って人足代の足しにするなど苦労に苦労を重ねて完成にこぎつけました。

昭和22年のカスリーン台風浸水域

図を見ると、武蔵国東部低地は上流部で破堤すると旧川筋(古利根川)に沿って江戸まで来てしまうことがわかります。

この地形的構造は今も変わりません。

ゆえに伊奈家はこの地帯の自然河川を取り除いて、その縁で江戸川を流すようにしました。

実は利根川東遷と聞くと利根川の本流を太平洋に流すことだと勘違いしがちですが、利根川を栗橋で権現堂川に繋ぎ、江戸川に流すルートが本流だったのです。利根川治水は、上流部の中条堤で氾濫を抑え、上記のルートで大半の水を流すことが要でした。

首都圏外郭放水路

国道16号線の地下には首都圏外郭放水路(春日部市)という図の地域で発生した洪水を吸収する巨大な地下タンクがありますが。タンクにたまった水は江戸川に放水しています。

つまり埼玉東京東部低地の水害対策の基本思想は伊奈氏の頃から変わっていないのです。

忠治の偉業により、関東は広大な耕地が広がり、東北、関東と江戸を結ぶ水路が網の目のように張り巡らされ、江戸と結ばれた地方には野田や銚子の醤油、佐原の酒、猿島のお茶など多くの産業を生むことになりました。

また、中条堤、権現堂堤、江戸川を要とする治水システムは機能し、それまでのように流路が頻繁に変わるようなことはなくなりました。

忠治は父忠次同様、関東の民から慕われていました。谷和原領福岡堰や伊奈領岡堰、相馬領豊田堰(取手市)の関東三大堰には頌徳碑等が建っています。

取手の毛有薬師堂は忠治が眼病に罹った時にその平癒を祈願して建立されたものです。

忠治の人柄が偲ばれます。

「秋になり、小貝川沿いに広がる黄金の帯は、相馬二万石と呼ばれてきた豊かな取手の象徴です。

川と闘いながら川の恵を享受してきた市の歴史をさかのぼると、江戸時代に川の道を作った関東郡代、伊奈半十郎忠治に行き着きます。」と取手市のホームページにありますように今も郷土の恩人として扱われています。

小貝川福岡堰の桜、伊奈神社の脇、昭和16年建立

寛永6～7年(1629～1630)、当時鬼怒川と小貝川はつくばみらい市の寺畑付近で合流しその下流域を広大な湿地帯にしていた。

忠治はこの二川を分離し鬼怒川を台地を掘り進んで常陸川(現利根川)の30㎞上流に流し、小貝川もその下流の大地を開削し、常陸川に合流させた。

この工事の結果広大な湿地帯は水田に代わり、また新たに設けられた山田沼堰と豊田堰、岡堰によって、谷和原領3万石、相馬領2万石を潤した。

この伊奈神社は福岡堰を見下ろす高台にあり、祭神は伊奈半十郎忠治。昭和16年4月18日建立。

関東郡代として、福岡堰をはじめとする治水事業に取り組み、谷原領開発に功績のあった伊奈忠治公を偲んで建立されました。

例祭は毎年4月18日で例祭を行った後、福岡堰からの取水を開始する。

5万石という土地開発のスケールはどのくらいかというと、江戸時代の川口市の石高が 19,500 石だったので約2.5倍。

関東郡代の成立

寛永15年(1638)に勘定奉行の勘定頭に任命されますが寛永19年(1641)「今まで国用の事 勘定頭にあずかりしをゆるされ、これより関東諸代官の得失を糺し、堤防修築のことを勾当専門すべし」と、勘定頭をはずれ、地方官として関東の諸代官の監督する権限と、河川事業を一手に担うことを命じられます。これが正式な関東郡代の始まりとされています。

正保4年(1647)忠治は「領内に飢民なきをもって」褒賞を受けます。

上下共に信頼を集めた忠治は後の伊奈家の地位を不動のものにしたのです。

忠治は赤堀川の通水を見ることなく没しますが、その子半左衛門忠克(ただかつ)が父の遺志を継いで赤堀川の通水に成功します。

ここに60年に及んだ利根川東遷事業は完成しました。そして忠次の描いたグランドデザインと忠治の築いた権力基盤はその後も子孫に受け継がれています。

伊奈家菩提寺の源長寺にある伊奈家頌徳碑は以下ように結んでいます。伊奈家が代々良き民政官だったのはこの文に由来しています。

「農政を司る者の務めは暗に(それとなく)古職(古代中国の官職)に当てはまる。治水や道を通し、境界を正し溝を掘り、ここに灌(そそ)ぎ、ここに漑(うるお)す。是を以て種をまいて植え、産業民を利し、貢税は国を富まし、下を労わり行政を施行する。

上に奉じて力を尽くし、訴えを聞いて決し、意見があれば直をもってする。

一万石の禄(知行地)、五位(従五位下)に登用される。

子に伝え孫に及ぼし、順々に其の決まりを受ける。」

＊ 忠次が小室領1万石と従五位下に叙されたこと。

以上

玉川上水工事の影の立役者 伊奈半十郎忠治

各駅停車しか止まらない多磨霊園駅で京王線を降りて一本裏通りに入ると、車が一台通れるくらいの狭い道に生垣などがあり、昭和の香りが漂う閑静な住宅街が広がっている。そんな小路を南に行くと、路は緩やかなS字カーブを描きながら下り坂となる。

ここは武蔵野台地の南端にあたり、『立川崖線』と呼ばれている古多摩川が作った浸食崖である。

武蔵野台地は東京中西部に広がるおおよそ700㎢に及ぶ広大な台地で、その東端は文京区、台東区、港区にまで達する。

この立川崖線を下る坂の名前は『悲しい坂』というのだが、なんとも閑静な住宅街には似合わない名

前だ。この坂の名前の由来は、玉川上水の工事とかかわりがあるといわれている。

玉川上水は、ここから直線距離にして5.5㎞も北の小金井界隈を流れているのに、なぜこの地に玉川上水の工事に由来する名前が付いているのか。

玉川上水は、工事の総奉行に老中松平伊豆守信綱、水道奉行に伊奈半十郎忠治が命ぜられた。

工事を請負ったのが農民出の玉川兄弟で、その功績により『玉川』の姓を名乗ることを許され、二百石の扶持米と永代水役を命じられた。

取水口のある羽村(市)の取水堰と玉川上水終点の四谷大木戸の標高差は92ｍ、全長43㎞ある。それをわずか8ヶ月で掘りぬいた逸話が残っている。

しかし玉川上水の工事は、2度の失敗を経て漸く3度目に成功したことは、あまり知られていない。

当初の計画では、立川市と日野市を結ぶ日野橋下流の青柳村(現国立市青柳)付近の「日野の渡し」があった、多摩川河畔から取水すべく工事が始まった。

府中市の八幡下から、東京競馬場北側の滝神社のところを東方へ向かい多磨霊園駅の南方を経て神代あたりまで掘削して試験的に通水したところ、この「悲しい坂」の辺りで流れが地中に浸透してしまい、下流まで流れなかったといわれている。

ここ等辺の地盤は富士山の噴火した灰の積もった関東ローム層で、土中に水が浸み込んでしまい、下流まで流れなかったのである。

そこで取水口を福生(市)に替えて工事を始めるが、今度は当時の技術では掘りぬくことの出来ない大きな岩盤に突き当たってしまう。その工事の跡が空堀となって福生市熊川の『みずくらいど公園』に残されている。『みずくらいど』とは、『水喰らい土』のことで、関東ローム層の非常に浸透性の高い土地であることを意味している。

3度目に羽村に取水口を決めたのは、松平伊豆守信綱の家臣で野火止用水の開削者安松金右衛門によるものだとも言われている。

悲しい坂を下りきったところに府中市が設置した石標がある。それによると

『責任を問われて処刑された役人が「かなしい」と嘆いたことから、この名があるといわれます。このときの堀は、今も『むだ掘』『新堀』『空堀』の名で残っています。　昭和60年3月　府中市』

と記されている。

杉本苑子著『玉川兄弟』では、この失敗により工事責任者であった水道奉行の伊奈半十郎忠治が責任を取って切腹するシーンが出てくるが、その後書きで、「伊奈半十郎は病死かもしれない」と述べている。

また松浦節著『伊奈半十郎上水記』では、「二度水喰らい土に阻まれて工事に失敗。この難工事の最中、玉川兄弟と現場で打ち合わせ中に伊奈半十郎は突然心臓を押さえるようにして倒れこみ、砂川の陣屋に運ばれた。一度は回復するものの、二度目の発作に襲われ六十二歳で病死した。」とされている。

史実によると、伊奈半十郎は承応2年(1653)6月27日に死亡し、家督は子息の伊奈半左衛門忠克に引き継がれている。

子息が家督を継いだことから、工事の失敗の責任を取らされて切腹したというのは所謂『都市伝説』であり、おそらく病死が真実と思われる。

伊奈半十郎忠治は関東郡代で、農地改革や河川修治の仕事に多くの功績を遺した。利根川を東京湾から太平洋の銚子に流し替える工事は、忠治から始まって伊奈家3代、60余年に及ぶ大事業を成し遂げている。

平成に入り、東京競馬場脇の滝神社下で道路工事中、玉川上水試掘跡の遺構が発見されている。

重要資料　2020/04/13 コピー

鴻巣市勝願寺の
伊奈忠次、
忠治の陵墓

2013.11.17

参考文献「水を治め、水を利する」
ＡＧＣ新井宿駅と地域まちづくり協議会
関東郡代伊奈氏の２００年研究班

〒333 0833 川口市西新井宿 362 リカベル
[mailto:info@araijyuku.jp] FAX 048 281 9939

相馬霊場参加者用資料 2020/05/31